

The Housing Which Nurtures Community
The Possibilities of Cooperative Housing

Yasuhiro Endoh

Professor
Urban Environmental Systems
Department of Technology
Chiba University

(1) Characteristics of cooperative housing in Japan

Today in Japan, cooperative housing is defined as “the method by which those willing to construct their dwellings on their own get together to organize an association, draw up project programs, take on necessary tasks including site acquisition, housing design and selection of contractors, and acquire as well as manage the completed housing”.

Breaking with dwellings as commodities dominant in this industrial society, cooperative housing is one constructed through the collaboration of dwellers on the principle of reasonable costs, where their desires and ideals are given palpable forms. So far, it is a housing dividedly owned by the occupants, though renting system is adopted in a small number of projects. At the same time, the creation of a third form of ownership is in future perspective; one which combines the public, or the communal possession of premises by resident associations with reserved private property rights.

In Japan, cooperative housing movement has widely spread since 1974 mainly around big city areas, producing approximately 300 projects or 7,000 units across the country. Merits offered by cooperative housing include: 1) it allows building design and room layout fit for family breakdown and individual tastes 2) safe and defect-free housing units are available 3) multi-family living enriches squares and other communal spaces 4) it helps nurture quality communities as well as the awareness of communal way of life.

Despite these merits, the number of projects has since not shown a significant increase the major reason being the rocketeering rise in land prices over the period.

There are two different types of approach towards the realization of cooperative housing : (a) coordinator-initiative approach where professional coordinators including architectural designers play a major role and (b) user-initiative approach where the dwellers, while receiving help and advice from professional people, basically take the initiative through the whole process from occupants solicitation, site selection, organization of future occupants associations, through housing and room layout design, selection of contractors, project launching, to completion followed by moving in, drawing up of management regulations and administration of resident management associations. This approach (b), which is more likely to give birth to unique housings and communities where residents' outlooks are reflected, tends to be accompanied by various difficulties as in site acquisition and occupants solicitation. On the other hand, following the approach (a), the efficiency in project progression ensured by professionalism may discourage natural formation of communities which takes time. Excellent communities can be formed, however, if the professionals give appropriate consideration to the invention of mechanisms which prompt dweller participation in planning processes.

The overwhelming majority, approximately 95%, of the existing cooperative housing projects are constructed through the coordinator-initiative approach, with the approach (b) accounting for merely 5%. By contrast, every case models quoted at symposia and

other cultural meetings belongs to the user-initiative category. Among these models are U-Court, which is cited as a landmark in cooperative housing projects in Japan, and M-Port, which was awarded 1995 Annual Architectural Design Commendation of AIJ (Architectural Institute of Japan). Both are the projects the author was directly related with from their planning stages to POE (post occupancy evaluation).

(2) Tow Co-operative Housings Where a Traditional Japan Has been Given a New Life

The first steps have been taken of a housing which, in review of the prevalent uniformity in housing, relies on the willingness and imagination of residents. Here, the housing supply, have been vividly revived, taking on new forms. Co-operative housing is an attempt to put into question the relation between individuals, as well as between people and nature, the relations through which 'connection' is brought into being. The purpose of this essay is to consider the possibilities of co-operative housing as such an attempt possesses.

Out of enjoyable conversations and collaboration between people brought together by chance, a diversity of places and opportunities of connection are created. Here is something close to a traditionally Japanese way of thinking in which, unlike the strict distinction between self and other and between people and space in modern rationalism, opposites merge together and every individual or family prefers a way of living open in all directions.

What 'Japanese tradition' means is a question that requires a deep and systematic examination. Let it roughly mean here a unique culture characterized by harmony and interval/ distance found in the way people relate with each other and with all life around them. In co-operative housing as an exploration of the quality of life, one can see the desire for such harmony and places of connection and its realization. Making it clear that such places of connection are multiply woven together in the two projects,

U-Court and M-Port, and thus contributing to housebuilding both present and in the future; this is what this essay aims at.

Whereas the approach by the initiative of experts and sponsors leaning to 'materialism, money and institutions' tend to end up with outcomes. Both in hardware and software, which are straight-lined, divided, homogeneous and vertical-relationship-oriented in nature, the participatory design, which pushes forward the 'In the beginning were people, living and life' principle, generates and fosters site of a soft and flexible connection, where the organic, intuitive, decentralized, ecological, sound and enlivening are bound together.

コミュニティを育むハウジング ーコーポラティブ住宅の可能性

千葉大学工学部都市環境システム学科・教授

延 藤 安 弘

(1) 日本のコーポラティブ住宅の特徴

日本のコーポラティブハウジング（CH）に対する現在の規定は、「自ら居住するための住宅を建設しようとする者が組合を結成し、共同して事業計画を定め、土地の取得、建物の設計、工事発注、その他の業務を行い、住宅を取得し、管理してゆく方式」である。

それは、今までのところは、産業社会における商品化された持家をこえて、集まって協働することによって住み手の思いのこもった実費主義でつくる、区分所有方式の持家である。中にはわづかではあるが賃貸方式もある。加えて、その将来像は組合の不動産所有という公共性と個人の資産権の留保を組み合わせる「第三の住宅所有形態」を生み出すという展望をもって進められてきている。

現代日本のコーポラティブ住宅ムーブメントは、1974年以降、おもに大都市圏で広がりを見せ、今日までに全国で約350のプロジェクト、約7,000戸の成果を見せている。

メリット（①家族構成や好みに合わせた間取りやデザインが可能、②欠陥のない安全な住宅を入手できる、③みんなで集まることによって広場や共同空間を豊かにできる、④共同生活意識や良質なコミュニティがはぐくまれる）があるにもかかわらず、戸数が伸びないのは、日本におけるこの間の地価の高騰が最大の原因である。

CHの進め方には⑧コーディネーター主導型と、⑨ユーザー主導型とがある。⑧は、建築設計者などの専門的コーディネーターが中心的役割を果たすもので、

㊦は、住み仲間集め、用地選定、住宅建設組合の結成、建物や間取りの設計、工事発注、着工、完成入居、管理規約作成、居住、管理組合運営に至るまで、専門家の手助けを得ながらも、基本的に住み手が全プロセスの主導権を握るタイプである。㊦の方法は住み手の思い入れのこもった個性的な住まいとコミュニティを生み出す可能性が高い反面、土地の取得や参加者集めなどの苦労がある。㊦は、効率性がコミュニティづくりをセーブする一面もあるが、住み手の参加の仕掛けを工夫すれば優れた集住環境が生成される。

全体に㊦が約95%、㊦が約5%であり、圧倒的にコーディネーター主導型が多い。

講演会でプレゼンテーションする典型事例は、いずれも㊦ユーザー主導型であり、「ユーコートは日本のコーポラティブ住宅の金字塔」と言われ、Mポートは、日本建築学会作品選奨を受けている（1995年）。これらの2ケースは、筆者が直接その企画から居住後評価（POE）に至るまでかかわっている。

(2) 日本的伝統を再生するコーポラティブ住宅

ユーザー主導型のコーポラティブ住宅Mポートとユーコートでは、住み手たちが生活の質の想像力の探検のプロセスをたどりつつ、多重の縁りあいの居場所をつくり、育みつづけている。「生活の質」とは、人と人との関係、人と生命との関係のことをいう。「縁りあい」とは、そうしたヒト・モノ・キモチ・コト・トキの連鎖の過程がお互いに重なり合うことによって、それぞれが豊かになる状態のことをいう。「いろいろな人の働きがあって起こることを縁起という」（注1）が、コーポラティブ住宅は、人と人との関係、ヒト・モノ・イノチ・コト・トキが縁って起こる、つまりいかなるものも孤立して存在しているのではない、無限の連鎖の過程が育まれる住まいである。

ご縁あって出会った人々が、対話を楽しみながらコトを進めていくことにより多様な縁りあいの場所・機会が生成されていく。そこには、主体と客体、人間と空間を分けて考える近代合理主義の考え方よりも、両者の融合・連続と各自（戸）がまわりに四方あまねく及ぶ、開かれた住まい方を志す日本的伝統の

考え方に近いものである。

日本的伝統とは何をさすのか。深い体系的検討が必要であるが、ここではおおまかに、人と人、人と生命とのかかわりの和みや間合いのある独特の文化のことをいう。生活の質の想像力の探検としてのコーポラティブ住宅ではそうした和みや縁りあいの場所への願いとその成果がみられる。本稿のねらいは、ユーコートとMポートが縁りあいの場所を多重に織りなしていることを明らかにしつつ、これからの住宅づくりに資することである。

a. 外に内がある・・・扉の外も私たちの住まい

ユーザー参加のハウジングにおいて大切なことは、住み手たちが住まうことに対するユメを自由につぶやける状況づくりである。同じコーポラティブ住宅といっても、かかわる専門家が、住居の間取りの自由設計に重きをおいたコトの進め方をすると、住まうことのユメは内にこもってしまう。一戸建てであれ集合住宅であれ、住居形式に関係なく、間取りの自由設計は当然のこととしつつ、住み手たちと共に住みあうことのやわらかい感覚回路を開き、洗練させることが、参加のデザインの眼目である。

ユーコート・Mポートの設計過程の内容は、すでに記したのでここでは繰り返さないが（注2）、両プロジェクト共に、家と家のスキマを豊かにする外に眼を向ける環境意識を育む学習と討論を重ねた。その結果、集会所や広場といった人々の出会いのための機能的空間の充実にとどまらず、そこにこめられた住み手たちの思いは、日本の伝統的な集まり住みあう生活慣習への思い出を生かすことに特徴があった。例えば「共同菜園でとれた野菜をご近所におすそわけをしたいナ」「四季折々に子どもたちが戯れる様子を窓の内側から眺めたいナ」など、そこには、現代が喪失しつつある人とまわりのかかわりが日常的・非日常的に多発することへの願いがうずまいていた。

かつての日本の地域社会には、都会にも田舎にも、こうしたゆるやかな他者とのかかわりのある暮らし方が息づいていた。ユーコートでは「扉の外も私たちのすまい」という表現の住まい方宣言が入居後つくられたが、その思いのか

たち化の主要なものをあげれば次のようである。

第1に、各自が階段をおりてくると人と人が自然に出会える対面性の色濃い共用庭囲み型のレイアウト（コモン・アクセス）。第2に、共用庭のスケール（D）と住棟の高さ（H）の比（D/H）が古来人間の視覚的安心感の範囲とされている1～2の間（仰角45度～27度）におさまっている（ヒューマンスケール）。第3に、各戸のバルコニーからつたをはわせることによる立体緑化の手法は、人々を外から帰ってきた時に48戸全体が我が家と思わせる効果を見せている（共感性）、等々である。

こうした人間関係を育むコモン・アクセス、居心地のよさを心理的に育むヒューマン・スケール、個と全体の連続を自然に感じとれること等は、これらが相互作用をおこして「外に内がある」意識を住み手たちにさりげなく与える。一般的に公共や共同といえ、ややもすれば誰のものでもないよそよそしい場になりがちであるが、日本の伝統的な路地や辻広場のような共用の場は、住み手たちが共用空間なのに私のものである「外に内がある」意識を育んできた。こうした「外に内がある」「共用空間の個人化」の意識とふるまいは、共用でありながら個人が愛着をもちつつ責任をもって利用・管理する場所としての「共同領有空間」をもたらす。

領有概念を鋭く的確に提起した山本哲士が語るユークコート評価に耳を傾けるならば、「共同領有空間は、俯瞰・仰角の視野から日射域、中庭のような共有域、樹木等の自律－他律のバランスのある設計を要される。個人化はわがままではなく、他者の自己実現をも助ける自己の自己実現という厳正さを背負うのだ。つまりコンビビアルな空間の論理が働いている領有空間となっている。資本主義的な共同所有でもない、私的領有と共同領有との間での領有空間設計が実現されている。」（注3）

住み手が内と外を連続的にとらえていた伝統的住意識が、現代の人工的高密都市居住空間において、このように再生されている。そこには、人間と環境との相互作用から生まれる生活の質への住み手たちの思いの発露が反映されて

いる。

b. 内に外がある・・・個と集合の有機化

かつて日本の住居は内に外があった。生産空間と生活空間の接点をなす土間近隣の人々はその気もちのよい場所に引き寄せられて集まった縁側やいろり等は、多様な人と人、人と生命のふれあいを可能にしていた。

現代社会がそうした場所をなくして久しいが、住民参加のデザインでは、住み手たちはかつての暮らし方に滲む豊かさを呼び戻している。設計段階で子どもの頃の原風景を語っているうちに新しい状況の中で、伝統的空間の実現に到達する。

ユーコートの子Kさんは「農家の土間に大きなカメがゴロンところがっている様子が忘れられない」のつぶやきから静ひつな土間のようなリビングルームと動く畳のある和室の連続空間をつくった。動く畳は父親たちが飲み会をする時のかっこうの場となる。ある男性は、夜遅く帰ってきても自分の家に帰るといふような「イッパイ飲み屋」のような「外」の役割を時には果たしている家である。

やがて、Kさんは自分もそして他の男性たちも大好きな「いろり」をもちこんで、いっそう男連中の集まりやすい場に育んでいった。

いろりといえば、ユーコートは入居当初から本格的ないろりをつくったU邸がある。いろりが生まれた背景には2つの理由があった。1つは父親が子どもの頃いろりのある暮らしをいていたこと。いま1つは、次のようなエピソードである。狭い民間のアパートに住んでいた親子4人はそこから逃れるかの如くよく山歩きをしていたが、ある日、雨やどりのために山小屋に入ったらいろりには赤い火が燃えたっていた。それをみた小さい娘さんが突然、「お父ちゃん、火のあるうちに住みたいナ」とつぶやいた。このような子どもの頃の原風景と今のライフスタイルを設計者に語っているうちに、いろりのある間取りが生まれた。

Mポートには、リビングルームにスチールの「四阿(あずまや)」と木の「庵」

があり、壁際の書棚が家並を形どっているため「House in House」と呼ぶ家がある。玄関に入ったところの正面には土壁の「倉」(納戸)がある。「四阿」・「庵」・

「倉」のいずれも、日本人の生活空間の原単位である4.5帖大のスケールである。こうしたいずれも「外」にあるべき空間が「内」におかれることによって、外からやってくる人々には、「内に外がある」「ここは広場のようだ」と感じられる。

各戸が均質的でなく個性的にデザインされるコーポラティブ住宅では、このように内と外がある空間の形式がみられる。そこでは住む人にも来訪者にも、内と外、個と集合の間にゆるやかな連なり感性の束を届けられる。そのことは、住むことが「内向き」「個化」に偏りがちな状況を超えて、まわりに開いて住まうことによって、人間も環境も育まれていくといった伝統的感性の永続的拡大と洗練の方向をもたらしてくれる。

c. やわらかい境界・・・縁側のようなつづきベランダ

日本の伝統的居住空間は、家と家、家と外まわりの境界が分断されることなく、やわらかく連続していた。軒先、縁側、路地、格子、引き戸等は、境界のやわらかなデザインという視点から、これからの住居のありようを示唆している。なぜならば、他者との切断から他者とのゆるやかな接続が、未来の都市住居のモデルでありたいからである。

物質的に豊かな社会で失われた人と人のゆるやかな関係、伝統的「もやい」の再創造を希求した熊本の住み手16世帯は、Mポート建設にあたって、つづきベランダをスムーズに受容した。それは前例としてのユーコート学習をしたこともあるが、つづきベランダを「もやい」の住まい方の象徴として理解したからである。

直線的なベランダを連続・開放化すると、大人同士の視線のぶつかりあい等、プライバシーが損なわれる恐れがある。そのことを避けるために、各戸の配列を雁行させることにより、視覚的プライバシーを保つように工夫されている。しかし、子どもたちは、つづきベランダがあるために自由移行が可能となり、

自分の家のみならず、他所の家も我が家と思えるような開かれた関係がもたらされている。

私秘性と高機密・高断熱のやり方を機能・性能面に強くあらわしすぎるために、現代住居の閉鎖性と固さはとても気がかりである。それらの重要性を認めながらも、まわりに開く住まい方が子どもや高齢者の日々の暮らしにとっては重要である。なぜならば、彼らは他者（まわりの人々や自然や出来事）とのかわりのなかでこそ生活・生命を継続・高揚させる存在だからである。

そうした視点からつづきベランダは真事に有効である。それに「あそこにいけば日なたぼっこや何気ない話し合いなど気持ちのいいことがおこる縁側」のような場所だからである。例えば、ある日の夕方、ある家でベランダに七輪をだしてサンマを焼きだすと、自らそのなおいに引き寄せられて、つづきベランダをたどって数軒のメンバーが各戸数品もち寄りの自然発生的な「七輪パーティ」が開かれる。そういう時、つづきベランダは、子ども・大人・高齢者たちの心豊かに、共に食と話し合いを楽しみあえる場となり、まさに、先にふれた共同領有空間として共に住みあうことの生気にひたされた場所となる。

Mポートの管理規約では、つづきベランダは「領有空間」という定義がなされている。即ち、そこは所有形態としては共有であり、利用は基本的に専用であるが、必要な時共用の場になることをさまたげないことになっている。従来の各戸間の閉じたベランダでの専用は、他者の利用を排除する「専有」と同義である。

伝統的に路地という空間は、共有・共用であるが、決して誰のものでもないというよそよそしい乾いた場ではなく、住み手たちが軒先や犬走り空間で園芸活動を営む等の専用的ふるまいが滲むことによって生じる独特のやわらかい「共同領有空間」であった。

つづきベランダは、縁側の「開放性」と路地の「領有性」の再創造の場所なのである。

d. 多義性と偶発性を生む・・・路地のような階段室

路地という伝統的生活空間には、次のような集住生活景観に見られるゆるやかかつ多様な関係性の特質がある。

- ・人をあたたかく迎えてくれる。帰着感を高める（アプローチ性）
- ・よそ者の立ち入りを防ぎ、居住者集団内部の自尊心を高める（領域性）
- ・私と共のあいまいな性格をもつが、その時々にもっと適切に利用・管理する（領有性）
- ・通過交通のない安心できる場（安全性）
- ・子どもが自由に徘徊できる遊び空間（徘徊性）
- ・風と光と雨をとりいれ身近に自然を呼び込む（自然性）
- ・格子や開口部を通して内から外へ、外から内への相互の気配を感じとりあえる（相互性）
- ・向こう三軒両隣り的な自然なつきあいを育む（対面性）
- ・おすそわけや立ち話など近隣住民のコミュニケーションを育む（交流性）
- ・草花育てなど住み手の自然観・生活観を自由に表現できる（表出性）
- ・四季折々の行事や咲く花の変化により時の移ろいを感じさせる（季節性）
- ・オモテとウラ、ハレとケの生活リズムを喚起する（リズム性）
- ・住み手のふるまい、創意によって他者を感動させる場が生まれる（偶発性）

これらの諸属性は、集まり住みあう関係（ソフト）を豊かに育むための空間（ハード）の装置としての路地の魅力を示している。

ユーコートを設計するとき、住み手たちと設計者たちの間では「階段室は路地のようにしようネ」の合い言葉が交わされた。そこでは今日、これらの路地の諸条件がほとんど生きているハードとソフトの呼応関係が生成している。

Mポートの時も同じようなことが語られ、そこでも同様なことがおこっているが、もっと意外なことが発生している。「House in House」には、階段室をはさんで、お隣が生活・経済両面で不要といわれた六平方メートルの空間を活用した「はなれ書庫」がある。三枚のスチールドアのうち一つは、常時開閉

自由であり、よその子ども・大人が立入ることができ、そこにしまわれている絵本や児童文学と出会えるようになっている。

小学校一年の女の子がある日、学校から帰ってくると母親が留守で家はしまっていた。彼女は階段室の机と椅子に寄り添い、まず宿題をテキパキとやってしまっ、その後この書庫から大好きな絵本にじーと見入ったりすることがおこる。ちなみに、その絵本は彼女が四年前に階段室で読んでいたものと同じであったりする。この階段室は、生涯その子の心に留まりつづけるような、かけがえのない絵本との出会いを生む子ども文庫の場となりえている。階段室における自然発生的な子ども文庫が、偶発的な生活エピソードを生み出している。

路地のような階段室は、こうした偶発的出来事を生成させることにより、住み手たちに、生命の高揚と拡大をもたらす場所を提供している。

e. 花鳥風月的住まい観・・・トラブルをエネルギーにする

木村徳国は、古事記、日本書紀、万葉集などに表現された「イエ・ヤド」という現在の住居に該当する言葉が付された修辞語を丹念に分析した結果、日本人には伝統的に家のすぐそばに草花や小鳥や月影などを一体的にとらえるものの見方としての「花鳥風月的住居観」があるとした（注4）。

住まうことの真の目的は、自己と他者（ヒト・モノ・コト・イノチ・トキ）とのゆるやかな相互交流により、たゆまず生の継続と高揚を育むことである。住居まわりの生命としての「花鳥風月」とのふれあいを可能にする住まい方は、いつの時代でも求められる。

住み手参加の住まいづくりでは、このことが豊かに実現される。それは願いが単純に生かされるからではない。「花鳥風月」の家の内外へのとりくみは、管理上のトラブルを生みかねないが、参加のプロセスはそうしたリスクをマネジメントできる感覚と手法を、住み手たちの間に育てていく。そのことにより、住居内外での自然との共生と不可欠なトラブルをエネルギーにかえられるが故に、コーポラティブ・ハウジングでは「花鳥風月的住居観」を受け入れやすいのである。

たとえば、入居後15年目をむかえたユーコートの中庭には、うっそうとした森のような環境が生成している。この異空間は時が育んだとともに、基本的に殺虫剤を使わない育み方をしてきたことが、こうしたちよっぴりワイルドな自然を回復・再創造することをもたらしているのである。

身近な共用環境に土・水・緑などの自然を配置した人工・自然の共生の環境づくりが今後ますます重要となつてこようが、モノ＝「対象」としての自然という見方ではなく、古代から日本人が自然との一体感という「関係」としての自然という見方を回復・再創造することが肝要である。その際、つくる段階と管理段階のユーザー参加をはかることによって、人々の生命との生きた交流体験が、おこりうるリスクを自ら責任をもってコントロールする意識とともに、自然との共生観を自己のものとしていく。

例えば、ユーコートの共用庭で、ある年の夏の夕方、小学校4年生の男の子が、繁茂した緑の蔭にハチが巣をつくっているのを見つけた。彼は「今晚、このハチをとって食べよう」と、それにイタズラをしているうちに、ハチはおこつて彼のおデコをさした。たちまちはれあがり、彼は泣き叫びながらユーコートの緑おじさんのYさんに「ハチわるいやつや、退治してくれ」と訴えた。Yさんは「わかった。退治したる。そやけど、ちょっと待っててな。向かいのOおばあちゃんにきいてくるさかい」といって、YさんはOさんのところへかけつけた。Oさんは「ここにいるのはスズメバチやない。スズメバチやったら人間に危害を与えるけど、ここにいるのはアシナガバチや。アシナガバチは人間が悪いことせんかぎり絶対ささへん。今回はあの子がイタズラしたからさしたんや。ここはハチもムシもヒトもみんないっしょに生きていくとこや、というといて」という知恵をだした。こうしてハチの巣はそのままおかれた。その子どもは痛い目にあつたけれども、この思いがけないエピソードによって生涯、自然との共生についてのさりげない意識が体内にすりこまれた。

自然を対象化する近代的見方を越えて、コーポラティブ住宅では自然との共生・関係化を大切にすゝる伝統的見方が、日々の居住実践活動のなかで、住み手

の各世代に浸透していく。

f. むすび・・・・森羅万象の縁りあう場所

仏教では、「芥子須弥を容る」という言葉がある。それは芥子粒けしつぶのような小さなものしゆみせんのなかに須弥山けしゆみ いという途方もなく大きな神話的な山を潜ませている、即ち、目には見えなくとも、個々の存在が偉大な宇宙を内に秘めているということを指す（注5）。

住み手主体の住まいづくりは、物質文明豊かな現代にあって忘れられがちな、人が生きることと住まうことにおいて大切な精神文化　まわりの人間や自然に対して慈しみをもつ
を呼び戻し、再現する効果があることが以上の論述を通してはっきりしてきた。ハウジングの規模は芥子粒のように小さくとも、設計・居住過程のよく練り上げられたコーポラティブ住宅は、ヒト・モノ・イノチ・コト・トキの連鎖が互いに縁りあう場所、森羅万象が縁りあう場所を生成するとともに、小さな自己と居住者集団の中に大きな宇宙が存在するような、「芥子須弥を容る」住まい方の試みでもあることがわかる。

「モノ・カネ・セイド」偏重の専門家・事業主体主導のすすめ方は、直接的で、分断的で、均質的で、上下関係的性格のハード・ソフトをつくりがちだが、「ヒト・クラシ・イノチ」ありきの参加のデザインは、有機的・直感的・脱中心的・エコロジカル・健全な・生命高揚的などの縁りあうやわらかい場所を生成・育成させる。

森羅万象が縁りあう場所のデザインの実践と考察を重ねていきたいと思う。

(注1) 中村元『遙かなところー東洋の理想』(春秋社、1999年、81頁)

(注2) 延藤安弘『集まって住むことは楽しいナー住宅でまちをつくる』(鹿島出版会、1987年)、延藤安弘他『これからの集合住宅づくり』(晶文社、1995年)

- (注3) 山本哲士『住宅環境設計論』（『地球環境の文化学』、文化科学高等
研究院、1996年、101～104頁）
- (注4) 木村徳国『古代建築のイメージ』（日本放送出版協会、1979年）
- (注5) 1と同じ（79～80頁）

